



Title	スミスにおける地代論と自然價格論
Author(s)	石垣, 博美
Citation	北海道大學 經濟學研究, 4, 91-116
Issue Date	1953
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30997
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_P91-116.pdf



スミスにおける地代論と自然價格論

石 垣 博 美

一

スミスは、「国富論」第一編第十一章を地代の分析にささげている。この地代論の理論的前提をなす生産價格の規定は、これ以前の諸章なかんづく第六章および第七章にわたり闡説されているが、そこで説かれている自然價格論は、少くとも生産價格の規定にかんする限り、これにつづく地代の分析に照らしてみても、必ずしも首尾一貫しているとはいえない。以下、この点をめぐつてスミスの敘述に検討を加えることにする。

それにさきだつてあらかじめ一般的な観点から、問題の所在をいま少し明瞭に限定しておきたい。知られるとおり、資本制生産様式に照応する地代は、主として農業部面に発生し、土地所有者の手に引き渡されるところの超過利潤である。この超過利潤が成立するためには、一般的利潤率の形成と商品價格の生産價格への転形とを前提としなければならないが、さらにこれらのものは剰余価値の利潤への転形を前提とする。このように地代論は、その理論的前提として生

産価格の諸規定を必要とするが、後者がさらにまた価値論の展開を基礎として説明されるべきものであることは、いうまでもない。とすれば、地代論の課題は、いかにして地代を価値規定と矛盾することなしに説明するかにあるといえるだろう。いいかえれば、資本制生産の下における地代は、商品の価値規定から出発し、剰余価値の分析から利潤論へと、いふうに理論的展開が行われてのち、はじめて説明されるのである。ところで古典経済学をつくりあげた学者のうちでは、あらためて述べるまでもなく、リカードが、これを目標にして、価値規定に基づく地代論、すなわち差額地代論をいちおう原理的に完成した。そのさい、リカードはその著「経済学および課税の原理」の一章をスミス地代論の批判にささげ、事実上スミスの地代にかなする諸規定を摂取しているばかりでなく、これらを理論的に統一しているであつて、経済学史上スミス地代論の意義はやはり没すべからざるものがあると思われる。それではリカード地代論に素材的规定を提供したスミスは、リカードオに対比してこの地代論の課題をどの程度明らかにしめてゐるか、本稿ではこうした観点から、スミスの敘述を吟味してみたい。

二

まづ、スミスにおける地代規定が、もつとも端的に示されている文章をあげておく。

「土地生産物のなかには、それに対する需要が、つねに、それを市場にもたらすのに十分な価格以上の価格をそれと与えるような要素でなければならぬものがある。さらにまた、それにたいする需要が、そうした価格を与える要素であり得はするが、しかし必ずしもあるとは限らない土地生産物もある。前者は、つねに、地代を供するにちがいない、後者は、その時の事情に感じて、地代を供することもあり、供さないこともある。」⁽¹⁾

「土地の生産物は、その通常の価格が、それを市場にもち来すために使われねばならなかつた資本と、それに普通利

潤を加えたものを補償するに足るものでなければ、普通、市場に提供されることはない。もしも通常価格がこれ以上である時は、その剰余部分は自然土地の地代になるであろう。たとえ商品が市場にもたらされようとも、価格が右に述べた以上に上らない時には、それは地主に地代を提供し得ない。そしてこの価格がこの程度を超えるか超えないかは需要によることである。」

ここでスミスの述べている事柄を要約すれば、それは明らかに、土地生産物を市場にもたらすのに「十分な価格」とは、前払資本価値に平均利潤を加えたものであつて、もしも「通常価格」がこれ以上に超過するならば、この超過分は地代となつて地主の手に引き渡されるということに帰着する。そしてスミスは、「通常価格」が「十分な価格」を超えるか超えないかは需要の如何にあるとつけ加えているが、いまこの点をしばらく措き、事実かが第十一章第一節「常に地代を生ずる土地の生産物」の考察において指摘しているように、恒常的に大なる需要が、つねに前者をして後者を超過せしめるとすれば、「通常価格」はいちおう、単なる市場価格ではなくて、むしろ市場価格の諸動搖から區別された平均的市場価格、進んでいえば、市場調節的生産価格とみて差支えないであろう。これにたいして「十分な価格」は、後に詳しく述べるように、個々の資本にとつての個別的生産価格を意味するものと解しうるから、この場合、両価格の差額である右の超過分は、それゆえに差額地代をあらわしていると思ふことができる。もちろんスミスにおいては、差額地代と絶対地代との區別、さらに両者を含めた総地代のこれらとの區別が、必ずしも明らかになつてはいえない。むしろ、スミスの地代にかんする敘述から推察すると、多くの場合かれはたゞ莫然と地代という事実を表象しているにすぎず、したがつてその地代論も、地代現象の外観的記述に終止している憾みをまぬがれない。しかしそれにもかかわらず、右の超過分をいちおう差額地代を示すものとする理由は、スミスが他の箇所においても、勿論統一的に整然と述べているわけではないが、事實上差額地代をより明快に指摘しているからである。たとえば、次のようにい

つてゐる。

「賃銀と利潤とは価格の原因であるが、地代はその結果である。そこで次のように云いうる、地代は賃銀及び利潤とは異つた方法において、商品の価格の構成に入りこむ。賃銀及び利潤の高低は価格の高低の原因である、が、地代の高低はその結果である。」⁽³⁾

すなわち、賃銀と利潤とは生産価格のなかへ規定的に入りこむが、地代は決して生産価格に入りこまないといふのである。地代が賃銀及び利潤と異なる仕方では価格の構成に入りこむとする場合、スミスの意味するところは、一般的市場価格を調節する最劣等地の個別的生産価格は、地代を含まないが、しかしこれ以外の優良な土地種類の生産物の価格は、その個別的生産価格と自己の生産物の販売価格との差額たる地代を含み、したがつて前者においては地代は価格の構成に入らず後者においては価格の構成に入ることゝ指すと思われ。とすればこの地代が差額地代であることは明らかである。けだし、「差額地代は、商品の一般的生産価格のうちへ規定的に入りこむのではなく、一般的生産価格を前提とするからである。」⁽⁴⁾

だが他方、右の通常価格を、市場にもち出されるすべての土地種類の生産物全体の調節的市場価格、いいかえれば、資本一般があらゆる生産部面でもたらす生産価格とは異なつて、総土地生産物が市場に提供される価格の限界を示すところの生産価格プラス絶対地代と解することも、全く不可能なわけではない。そうすれば、この価格から「十分な価格」すなわち個別的生産価格を差しひいた剰余部分は、差額地代と絶対地代とを含んだ総地代を示すことになる。けれどもスミスにおいては、総地代を兩者の和として把握するまでにたちいつた分析がみられないし、またその地代にかんする敘述の全体にわたつては、むしろ差額地代と規定すべき地代について、多くの立言がなされていると思われる。つぎに述べる石炭価格や家畜の価格の決定についてのスミスの説明は、このことを示すものに他ならない。

たゞここで注意しておきたいことは、周知のようにスミスの文章のなかには、絶対地代を暗示する言葉が散在しているということである。たとえば、

「ある国の土地がすべて私有財産となるや否や、地主もまたすべての他の人々と同じく、彼らがかつて蒔かなかつた場所⁽⁵⁾で收穫することを好み、その自然的生産物に対してすら地代を要求する。」

「土地の生産物もその地代も、ともにその絶対的豊度に比例するのであつて、その相対的豊度に比例しない。」⁽⁶⁾
「それ故に、地代は土地の使用にたいして支払われる価格と考えられ、自然、一種の独占価格である。」⁽⁷⁾

スミスは、ここで、地代を要求するものは土地所有であることを正しく強調しているばかりでなく、土地所有の單純な發現として、地代がつねに一種の独占価格であると指摘している。一般に農業における資本の有機的構成は、非農業的な社会的資本の平均構成よりも低位であり、したがつて前者はより多くの可變資本からより多くの剰余価値を生産する。しかるに、この剰余価値は、土地所有の独占のために、必ずしも生産価格の均等化せず、土地生産物の価値は、それゆゑに非農業的生産物の平均市場価格以上に超過するが、そのさいこの超過剰余価値は、絶対的な・生産価格を超える価値の超過から發生する・地代となつて、土地所有者に收得される。とはいへ、この絶対地代が価値と生産価格との差額の全部に等しいか、それともこの差額中の多かれ少かれ一部分に等しいだけであるかは、まつたくたゞ、需要にたいする供給の状態により、また新たに耕作される領域の範圍によつてきめられる。だがそのいづれであるかを問わず、「農業生産物はつねにある独占価格で売られるわけであつて、それはけだし、農業生産物の価格がその価値よりも高いからではなくて、それがその価値に等しいからであるが、またはそれがその価値よりも低くはあるがその生産価格よりも高いからである。」⁽⁸⁾このように絶対地代は、事実において土地所有の独占によつて強制される価格であり、この点で非農業生産物の諸価格から區別されるのであつて、スミスが土地生産物の独占価格たる所以を、商品の生産価格によつ

ても価値によつても規定されず、もつぱら買手の欲望および支払能力によつて規定されるところの、本来の独占価格と混同せずに、正しく説明しているのは、かれの功績である。

- (1) Adam Smith, "Wealth of Nations," Cannan's ed., P. 146 (大内兵衛訳第一編第十一章二八三頁)
- (2) *ibid.*, P. 145 (前掲訳二八二頁)
- (3) *ibid.*, P. 145 (二八二頁)
- (4) Karl Marx, "Kapital", Bd. III, S. 696 (長谷部文雄訳第三部第四分冊六五一頁)
- (5) Smith, *ibid.*, P. 49 (一〇四頁)
- (6) *ibid.*, P. 173 (三三四頁)
- (7) *ibid.*, P. 145 (二八二頁)
- (8) Marx, "Kapital", Bd. III, S. 812 (二九三頁)

以上のごとくスミスが差額地代の規定をなしているとして、さてそれではこの場合、スミスにおいて市場価格はいかなる等級の土地の生産物がもつ個別的生産価格によつて調節されるか。これに答えるため、いま「国富論」から二つの事例をぬき出して検討を加えてみたい。

まづ最初に、スミスは石炭の価格についてこういつている。「石炭が相当長い期間にわたつて販売される最低価格は、一さいの他の商品と同様、それを市場にもたすために使われた資本を、その普通の利潤とともに回収するに辛うじて足るだけの価格である⁽¹⁾。」と。そうだとすれば、前払資本価値に平均利潤を加えた価格、すなわち生産価格が、石炭の最低価格に等しいのであるから、生産価格のみを補償する最劣等地の生産物の価格が市場調節的価格となつているのは、明らかであろう。つまりこの最低価格とは、スミスのいう「十分な価格」のことであつて、事実かれは別の箇

所でこれを最低価格と定義しているのである。⁽²⁾

つぎに家畜の価格をあげる。「その上耕作が拡大されると、未改良の荒蕪地だけでは屠肉の需要に感じ得なくなる。耕作された土地の大部分も亦家畜を飼育し肥大させるために使われねばならぬのみならず、その土地を耕作に使用した場合に、地主がそれから得べき地代と、農業者が得べき利潤とを支払うに足るものでなければならぬ。ところで最も耕作せられていない原野において飼育された家畜も、同一市場にもたらされる時には、その重さと品質とに比例して、最も改良された土地で飼育された家畜と、同一価格で売られるのである。これがため、それら原野の所有者は利益を得る。そして彼らの土地の地代を、彼らの家畜の価格に感じて引上げる。⁽³⁾」この場合、屠肉の市場価格が騰貴するのは、優良な土地から劣等な土地への移行によるのではなく、豊饒でない荒蕪地から豊饒な耕作地への移行によると述べられているけれども、スミスはここで正當に、差額地代を、市場価格が個別的生産価格以上に出る超過から生ぜしめており、したがつてまた市場価格を規定するものが、最劣等地の個別的生産価格であることを、指摘している。

このようにみてみるとスミスは、差額地代を生ぜしめる市場価値の法則を、たとえ明確な言葉をもつて定式化していないとはいへ、おおむね事実上明らかにしているといつてよい。何故なら、知られるとおり、スミスは、単に最劣等地の個別的生産価格による市場価値の規定、すなわち土地生産物を支配する市場価値の法則を理解していたばかりでなく、その前提をなすところの諸条件、すなわち地代は剰余価値であること、⁽⁴⁾同等面積の相異なる地所に充用された、同等分量の資本は不平等な收穫をもたらすこと、⁽⁵⁾しかも不平等な收穫をもたらす二つの、資本とはかわりがない原因は、地所の豊饒度とその位置であること、これらのことを知つていたからである。こうした重要な諸事項をうけついで、整然たる理論にくみ入れたことは、リカードの偉大な功績である。

ところが一方、スミスは、最劣等地の生産物の価格による市場価格の決定とは反対に、最も豊饒な炭坑が市場価格を

決定すると説いて、これと矛盾した敘述をなしている。すなわち、「最も豊饒な炭坑が、その附近の他の炭坑の全部における石炭の価格を規定する。この事業の所有者も企業家も、これらの石炭を附近の人々に比べて何程か安く売つた方が、前者はより大きい地代を得、後者はより大きい利潤を得る所以であることを発見するからである。そこで近隣の同業者は、そんな価格に堪えることができず、またそんな価格では彼らの地代及び利潤は益々減少し、時として全然失くなるが、にもかかわらず、どうしても直ちに彼と同一価格においてそれを売らなければならないことになる。そこである事業は全く放棄され、他の事業は少しも地代を生ぜず、わづかに所有者がこれを経営することになるのである。」と。リカードは、このスミスの所説にたいし、石炭にたいする需要が減少するか、もしくは新しい生産方法によつて数量が増大するならば、その価格は低落し、若干の鉱山は排棄されるが、しかしいづれにしても、地代なしに採掘されるところの鉱山の生産価格を償うに足る価格、すなわち最劣等鉱山の個別的生産価格が、市場価格を調整するといつて、反駁を加えている。⁽⁷⁾この限りでは、リカードの攻撃は、なるほどともであるけれども、しかしすでにスミスは、「炭坑地方においては、石炭は、どこへいつてもこの最高価格よりも遙かに安い」場合を前提しているのであつて、いいかえれば、ここでは採掘は決して劣等地へ移行することなく、つねに優等地へ移行し、そして優等地はつねに必要な増加供給以上のものを供給することが仮定されているのである。⁽⁸⁾そうだとすれば、最優等な土地に投ぜられた資本は、市場の状態と自己の比較的高度の産出能力とのゆえに、その生産物を競争者よりも安く売ることがでるし、またその生産物の価格が古い市場価格以下にある場合にのみ、その生産物を市場にもちこむことができると仮定されるのだから、そのために市場価格は低落し、したがつて劣等な諸鉱山における価格も低落せざるをえない。この低落は、いづれにしても、劣等な諸鉱山における地代を低落させ、あるいは全くこれを消失せしめることになる。何故なら、地代は、市場価格が個別的生産価格以上に出る超過分であつて、しかもこの場合、社会的に必要な供給増加以上の生産物が優良地に

において供給されるがゆえに、その市場価格が、特定等級の鉱山の生産物の個別的生産価格に等しいか否かを問わないのだからである。こうしてみると、リカードオの論駁は必ずしも正当であるとはいえないどころか、かえつてスミスのほうが、差額地代における上昇的序列を示唆している点で、重要な指摘と、正しい推理を行つていたのである。たゞ、豊かな鉱山や土地種類が市場を支配するという、一特殊事例を誤つて一般化していることは、おおうべくもないスミスの失敗である。

以上、当面の問題にとつて必要なかぎりにおいて、これを要約すれば、スミスの第十一章における敘述の主眼は、土地生産物にたいする需要が大となつて、その販売価格が、十分な価格以上に超過したとき、この超過分が地代化するという点にあるといえる。

(1) Adam Smith, *ibid.*, P. 167 (三二二頁)

(2) 「一つの商品は、その普通価格が絶対に大きい小さいかによつて、高い安いが云えるが、またその価格が、相当に長い一定期間、それを市場に賣すことができる最低価格を如何程超過しているかを標準としても、その高い安いがいえるのである。この後の意味で最低価格というのは、商品をそこに賣すに使わねばならなかつた資本を、相当の利潤とともに、償うに辛うじて足るだけの価格である。それは地主には何物をも与えず、地代がその価格の如何なる構成部分ともなつていない価格であつて、全部が賃銀と利潤に分解する価格である。」

Smith, *ibid.*, P. 213 (四〇五頁)

(3) *ibid.*, P. 148 (二八八—二八九頁)

(4) ローゼンベルグ、ブリュエーミン「経済学史」広島、橋本訳上巻一八八頁

(5) Adam Smith, *ibid.*, P. 165 (三一八頁)

(6) *ibid.*, P. 167 (三二二頁—三二三頁)

(7) David Ricardo, "Principles of Political Economy and Taxation", Gomer's ed., P. 317 (小泉信三訳下巻六八頁)

(8) Adam Smith, *ibid.*, P. 167 (三二頁)

(9) Marx, "Theorien über den Mehrwert" Bd. II. S. 118 (邦訳改造社全集版一三〇頁)

三

ところで、この「十分な価格」にたいし、スミスは、前諸章で自然価格を論じている。いわく、「自然価格は、いわば、あらゆる商品の価格が常にそれをめぐつて引きつけられているところの中心価格である⁽¹⁾。」と。この規定にしたがえば、自然価格とは、それをめぐつて日々の市場価格が動くところの、それゆえにまた日々の市場価格が一定期間中にそれにむかつて平均化されるところの、中心価格であり、すなわち生産価格である。だがそうすれば、生産価格にかんする二種類の規定は、矛盾するではないか。つまり、さきには地代を含まない「十分な価格」が生産価格として説明されているにかかわらず、ここでは後に述べるように地代を含むところの自然価格が、事実上生産価格として理解されているのである。スミスは第十一章地代論において、第七章の自然価格の敘述を、たゞ單純に捨て去つてしまつたのであるか。それともこの矛盾、混乱には、正当な理由がひそんでいるのであるか。

(1) Smith, *ibid.*, P. (一一九頁)

そこでまづ、スミスの自然価格にかんする論究を、ふりかえつてみることにしよう。「凡そ一つの社会またはその附近においては、労働および資本の用途が種々異つていても、それを通じて賃銀、利潤の両者に普通率または平均率というものがある。」⁽²⁾この「普通率または平均率は、これらが普通に行われている時および場所の、賃銀、利潤および地代の自然率と名付けていいであらう。」⁽³⁾「ある商品の価格が、土地の地代と労働の賃銀と、その商品を産出し、精製し、市

場に搬出するために用いた資本の利潤とを、これらの自然率によつて支払うに充分だけあつて、それ以上でもなくそれ以下でもないならば、この商品はいわゆる自然価格で売れるのである。」これにつづいて、スミスはつぎのようにいつている。「この場合には、この商品は正確にその当然の価値、いいかえれば、その人がそれを市場に提供するに實際費しただけに売れるのである。何となれば、普通の用語においてある商品の原価というときは、買ったものを再び売る人の利潤はその内へはいらぬと解しているが、もしかりに彼が彼の附近における普通率の利潤が得られないほど安い価格で売るとすれば、彼は明らかに、商業上の損失者となる、けだし彼にしてその資本を他の方法に使つたならば、彼はそれだけの利潤は得たに相違ないからである。」このスミスの言葉は明らかに「賃銀、利潤そして地代は、一さいの交換価値の根本的源泉であると同時に、すべての収入の根本的源泉である。」⁽⁵⁾といういわゆる価値構成論を前提としている。したがつて、スミスによれば、賃銀、利潤および地代は、それぞれ独立に価値とは無關係に決定された大いさの価値であつて、地代も賃銀、利潤と同じ仕方では価格のなかへ入りこむ、そして商品の価格はこれら三部分によつて構成されるが、この三部分が自然率にあるとき、その価格は自然価格である、いいかえれば自然価格は三部分の自然率によつて規定される、という帰結になる。しかも自然価格は市場価格の中心帰向点であるのだから、それが生産価格であることは疑いない。こうみてくると、スミスは、資本制社会の外観であるところの競争現象から出発して、その結果生ずるところの生産価格に着目し、これが収入の合計によつて構成されるという観点から、自然価格を説明しようと試みていることが知られよう。一般に資本制社会の物神崇拜の性格は、資本はそれ自身において利子を生み、土地は地代を生み、そして賃銀労働は労働賃銀を生み出すという、社会的生産過程の一切の秘密を包含する三位一体的形態としてあらわれるが、さらに個々の生産代理者にとつては、資本、土地所有および労働は、相互にいささかの類似点もないところの、三つの相異なる独立の源泉として現象する。こうした資本制社会の物神的性格をそのまゝうけとることによつて、

スミスは賃銀、利潤および地代の価値を与えられたものとして前提するとともに、これらの自然率が自然価格を構成するものであるとして、事実上の生産価格をかれの眼にみえるまゝに敘述したのである。もつともスミスにおいては、生産価格の敘述といつても、さきにもふれたとおり、市場価格の中心点としての生産価格を、この範囲内で正しく規定しているにすぎないのであつて、この点、リカードが、労働賃銀を与えられたものとした場合、個々の資本が生み出す利潤の平均率こそ、生産価格をうち立てるものだという正しい前提に立つているのに比較すれば、はなはだ未熟な議論であるといわなければならない。ちなみに、リカードは、社会的生産諸部に投下された個々の資本にたいする利潤率は、競争の作用によつて一般的利潤率に均等化され、その結果生産価格が成立することを明らかにしている。しかもこの場合、かれは、資本のある部門から他の部門への移動が行われる仕方を、詳細に規定しているのであつて、このことはリカードの功績の一つに数えられるものである。

さてそこで、スミスの自然価格が生産価格を意味するとすれば、何故に地代の自然率が、賃銀および利潤の自然率と同じく、そのなかへ入るのであるか、地代の自然率が入るとすれば、自然価格は生産価格として不適当ではないか、という疑問が生ずる。これに答えるため、つぎに、同じく生産価格として説明されている「十分な価格」と対比してみよう。

- (1) Smith, *ibid.*, P. 55 (一一三頁)
- (2) *ibid.*, P. 55 (一一四頁)
- (3) *ibid.*, P. 55 (一一四頁)
- (4) *ibid.*, P. 56 (一一四頁)
- (5) *ibid.*, P. 52 (一〇九頁)

上述の自然価格の説明に対比してみると、スミスは第十一章で、少くとも外見上では「麥説」⁽¹⁾しているように思われる。この章の理論的敘述の一部は、すでに述べたとおりであるが、いまこれを整理して、再検討を加えてみたい。スミスによれば、十分な価格とは、「土地生産物を市場にもたらすのに十分な価格」、すなわち前払資本価値に平均利潤を加えた価格であり、そして、通常価格が「十分な価格」以上にある場合、その超過分が地代化するとすれば、通常価格は、賃銀と利潤とは必ずこれを含むが、しかし地代はこれを必ずしも含まない価格であつて、逆にいえば、地代を含むとき「十分な価格」以上であり、それを含まないときこれに等しい価格であると、いうことができる⁽²⁾。この通常価格の規定から明らかなように、「十分な価格」にたいする通常価格の關係は、前諸章における自然価格にたいする市場価格の關係と、大いに趣きを異にしているのである。すなわち、後者の關係をみると、市場価格が、自然価格を中心点として上下に動搖するとはいへ、需要と供給とが一致するときは、すなわち「市場にもたされる量が正に有效需要を充足するに足る」ならば、市場価格は精確に自然価格に一致し⁽³⁾、したがつて、そのなかに地代を含まないということはいふに得ないの⁽⁴⁾にたいし、前諸の關係における通常価格は、地代を含まない場合にのみ、「十分な価格」に一致するのであるから、この価格が市場価格に必ずしも對應するものではないことは、多言を要しない。それならば、第十一章にいたつて、スミスが、このように一種独自の規定をうけている通常価格を、市場価格のかわりにもち出したのは何故であらうか。それは、かれが誤つて土地生産物を二種類に区分したからである。すなわち、かれは、土地生産物を、つねに地代を生ずる生産物と、時として地代を生じ、時としてそれを生ぜざる土地の生産物とに区分して、「人間の食料はつねに且つ必然に地主に何程かの地代を生ずるところの唯一の土地の生産物であるように見える。他の生産物は、それぞれの

事情の異なるのに従い、或はそれを生じ、或はそれを生じない。食については、衣と住とが人類の二大欲望である。⁽⁴⁾といつてゐる。そしてかれは、需要が地代を生ぜしめるか否かを決定すると説き、前者の場合には、「人類は他の動物と同様、その生活手段に比例して増加するものであるから、食物にたいしてはつねに必ず多少の需要がある、」⁽⁵⁾という人口理論から出發し、結局、地代は、通常価格が「十分な価格」以上にあるとき生ぜしめられる超過分であると説明する。これに反し、後者の場合には、「土地は、その原始未開の状態においては、養いうる以上の人口にたいして、衣・住の材料を供給することができ⁽⁸⁾る」から、これらの材料が過剰である結果、それらは「ほとんど無価値またはそれに近い、」⁽⁷⁾したがつて、通常価格は「十分な価格」に一致し、この価格は「土地所有者に地代を提供するものではない。」と説明する。こういう不手際な説明の方法をとつたため、スミスは、通常価格という曖昧な規定をもつ価格をもち出さざるをえなかつたと思われる。しかしそれにしても、土地生産物を二種類に区分することはもちろん、需要が地代を生ぜしめると解する仕方は、正しい理解とはいえないのであつて、むしろこのためにこそ、右のような価格規定の不明を招いたのである。いうまでもなく、資本制地代は、本来的農業における主要植物性食料の生産に投下された資本の地代として論ぜられるべきものであり、他の農業的生産物——たとえば亜麻、染料植物、ひとりだちの畜産など——の生産に充用される資本の地代は、これによつて規定される。スミスも、このことを知つていて、「人類の食料を生産する耕地の地代が、他の耕地の大部分の地代を規定する」⁽⁸⁾と述べており、この点はいかれの偉大な功績に⁽⁹⁾帰せしめられているにもかかわらず、この主張を一貫しないで、さきに述べた、土地生産物の区分を企ててゐるのである。しかもこのさい、地代の発生を需要から説明するのは、明らかに誤りである。けだし、市場価値から背離する諸市場価格は、それらの平均数からみれば、市場価値に均等化され、プラスおよびマイナスとして止揚されるがゆえに、需要と供給が一致した場合、それは何ものをも説明することができなくなるからである。したがつて、需要と供給との比率が、市場価値、スミ

スの事例においては通常価格を、説明するのではなく、逆に、市場価値すなわち通常価格が需要供給の諸動搖を説明するのである。

だがしかし、右の誤りを除いて考えれば、さきにも指摘したとおり、通常価格と「十分な価格」との関係は、これを一般的調節の生産価格と個別的生産価格との関係を示すものであるといえる。その理由は、スミスが、若干の事例のなかで、最低等地の生産物の個別的生産価格が、市場価格を決定すると認めていること、たゞそのさい、この関係を一般的調節の価格として確定していないだけであること、「十分な価格」は個々の農業資本にとつて十分なという意味に解しうるから、これを個別的生産価格と見なしてよいこと、である。これを要するに、「十分な価格」の規定は、生産価格の説明としていちおう正当であるのにたいし、同じく生産価格の説明として述べられている自然価格の規定は、必ずしも正しいとはいえないのである。

- (1) Marx, "Theorien" Bd. II S. 135 (邦訳改造社全集版第十卷一四六頁)
- (2) ここに述べられている通常価格 (Ordinary price) は、平均的な価格として、市場価格に対立するものである。すなわち一時の、偶然的な価格に対立するところの、平均的あるいは通常的価格 (average or ordinary price) である。波多野鼎著「正統学派の価値学説」八〇頁
- (3) Smith, "Wealth of Nations", P. 57 (一一七頁)
- (4) *ibid.*, P. 161 (三一二頁)
- (5) *ibid.*, P. 146 (二八四頁)
- (6) *ibid.*, P. 161 (三一二頁)
- (7) Marx, "Theorien" Bd. II S. 147 (一六〇頁)
- (8) Smith, *ibid.*, P. 159 (三〇中頁)
- (9) Marx, "Kapital" Bd. III S. 663 (三三頁)

四

だが他方、スミスの自然価格論は、いちがいに否定し去ることのできない一面をもつていられると思われる。というのは、マルクスがスミスの地代論を批判してこういつてゐるからである。

「そこで十分な価格とは、事実においてリカードがアダム・スミスからひき出したところの、そして事実において彼が資本主義的生産の立場からそれを表現したところの、生産価格であり、換言すれば資本家の前払いしたもの以外になお平均利潤を支払うところの価格であり、種々の資本投下部面における資本家達の競争がつくり出すところの平均価格である。スミスの論述は、通常価格が長期間においては自然価格の構成部分たる地代・利潤・賃銀を支払うに十分な価格だというふうに、あべこべに説明してはいるけれども、スミスをして彼のいわゆる自然価格を十分な価格に對置せしめるに到つたのは、實にこの競争からの抽象である。」

この章句から推察されることは、おおよそつぎのようなものであらう。一般に資本制社会において生産される剰余価値は、分配上の偶然的動搖を度外視するならば、さしあたり資本家たちの間で、社会的資本のうち各資本家に帰属する持分に比例して、配当として分配されるが、この姿態においては、剰余価値は、まだ資本に帰属する平均利潤としてあらわれるにすぎない。いいかえれば、一般的利潤率が成立し、これによつて、相異なる生産諸部面における充用資本の、与えられた大いさに照応する一の平均利潤が成立し、またこれによつて、価値が生産価格に転形する理論的段階においては、剰余価値は、ただ単に平均利潤として現象するのである。したがつてここでは、相異なる生産諸部面における資本といつても、それは、工業資本とか農業資本とかの区別なき社会的総資本一般の「可除部分」と見なされるべきであり、それゆゑ社会的総資本一般によつてつくり出される平均利潤もまた、商品に含まれている剰余価値の特殊的諸部

分がとる独自然諸形態に分裂していないものとして、論ぜられるとみるべきであろう。つまり、この段階では、土地所有と土地生産とを捨象した産業一般が議論の対象になつてゐるのである。してみれば、この平均利潤のうちには、地代が未分化の状態で含まれてゐると考えなければならぬ。しかるに、土地所有と地代とが問題となれば、地代は利潤から分化して、したがつてこの段階での平均利潤は、地代控除を前提しなければならなくなる。すなわち、地代論のなかで、剰余価値のうち資本に帰属する分前としての利潤について論ぜられる場合には、その分量においては総剰余価値と同一のものであるところの、総利潤からの地代の控除によつて、すでに制限されてゐる平均利潤を意味するのであつて、あらかじめ地代の控除が前提されてゐるわけである。だから、資本利潤と地代とは、剰余価値の特殊的二成分、剰余価値が資本に帰属するか土地所有に帰属するかによつて区別される二つの範疇、その本質においては何らの相違もない二つの項目以外の何ものでもない。そしてこの二つを合計すれば、社会的剰余価値の総和をなすのである。⁽²⁾さて、このような観点をスミスの所論に結びつけて考えるとき、賃銀、利潤、地代によつて自然価格が成りたつという場合の、この利潤と地代との合計は、地代論以前の抽象段階における平均利潤、すなわち農業と工業との区別があらわれていない産業一般がもたらすところの平均利潤を意味し、これにたいして、「十分な価格」が前払資本価値に平均利潤を加えたものであるという場合の、平均利潤なるものは、地代論の段階における地代控除が前提されてゐるところの平均利潤を意味するもの、と解しうるのではないであらうか。つまり、スミスの「国富論」第六章、第七章にわたる自然価格の論述においては、未分化のまゝの地代を含むところの総剰余価値が、前払資本価値にたいする利潤、地代の合計として説明され、したがつてここでの平均利潤は、諸資本の投下部面一般における資本家達(工業資本家、および農業資本家を含む)の競争がつくり出すものであるが、これにたいして、第十一章の地代論における「十分な価格」の敘述になれば、総剰余価値はいまや利潤と地代に分化されて、それぞれ産業資本家および土地所有者の手に收得され、したがつて、こ

の段階での平均利潤の性格は、もはや地代を含まないだけでなく、むしろそれを排除するものとなつてくるのである。だから、「十分な価格」とは、種々の資本投下部面（今やここでは工業資本家と農業資本家との区別があらわれる）における資本家達の競争によつてつくり出される平均価格にほかならない。こうみえてくると、「十分な価格」と自然価格との理論的関連は、前者を抽象したものが後者であり、前者をつくり出す競争から抽象した段階において後者が論ぜられるべきものである、という規定をうけることになるであらう。

右の引用文にあらわれているマルクスの解釋が、このようなものであるとすれば、スミスの混乱もいちおう理論的に一貫されうるかのごとくにみえる。

(1) Marx, "Theorien" Bd II S. 137 (一四九頁)

(2) 鈴木鴻一郎著「地代論論争」五八頁—六一頁

ところで、敘上のような意味において、自然価格が「十分な価格」の抽象であるとする、スミスの混乱は、たんに表面的な混乱にすぎないばかりか、むしろ鋭い洞見のあらわれであるとして高く評價されなければならない。しかも、スミスの自然価格の敘述は、さらにいま一つのメリットを含んでいるのではないかと思われる。それは、スミスにおける自然価格と「十分な価格」との矛盾のなかには、不完全ながら、絶対地代の構想が含まれていると考えられるからである。

スミスは農産物の交換価値をつぎのように規定している。農業資本に雇傭される労働者および役畜は、「製造業者の労働者の如く彼ら自身が消費したものに等しい価値、換言すれば、彼らを雇傭する資本及びその所有者にたいする利潤の価値を、再生産するのみならず、それよりは遙るかにより大きい価値を再生産するのである。すなわちこれらのもの

は、農業者の資本およびそのすべての利潤以上に、なお地主の地代を規則正しく再生産する。この地代は、その使用を地主が農業者に貸し与えている自然そのものの右の如き力の生産物と見做さるべきものである。⁽¹⁾」ここでは、農業資本は工業資本よりも多量の生産的労働を運転するだけでなく、農業では、自然が人間と協力するから、農業に雇われた労働は工業に雇われた労働よりも生産的である。そこで地代は、農業の資本利潤が工業の資本利潤を超えることによつて成立し、しかも需要と供給とが一致するときに、それが自然価格の一構成部分であると解されていることは明らかである。そしてまた、農業利潤が工業利潤よりも大であるにもかかわらず、それが平均化しないのは、土地所有の作用に基づくという見解であることも、明白である。そうすれば、工業利潤を超える農業利潤の超過分である地代は、絶対地代を示すものと考えられる。⁽²⁾何故ならば、絶対地代は、農業における資本の有機的構成が工業におけるそれより低位であるために、同一量の資本を投下しても、農業においては工業におけるよりも多量の剰余価値を生産し、したがつて農業生産物の価値は非農業生産物の価値よりも大であること、しかもそのさい農業では土地所有の独占力がはたらくため、この超過価値の平均利潤の均衡化が妨げられること、を条件として生ずるものだからである。さきにも述べたように、スミスの見解によれば、差額地代は個別的生産価格たる「十分な価格」と市場調整的価格たる通常価格との差額から生ずるが、ここではこの通常価格以上に農産物価値が上るのは、「自然の力」であると説明することによつて、絶対地代が明らかにされているのである。⁽³⁾このようにみてくるとスミスの自然価格は、需要と供給とが一致した場合の、賃銀、利潤、地代の平均率によつて構成されているが、この場合の地代の平均率または自然的地代は絶対地代に相当するものとなるから、スミスは自然価格において絶対地代を示唆していたと、いちおう主張することができるであらう。⁽⁴⁾

(1) Adam Smith, "Wealth of Nations" P. 344 (大内兵衛訳第二編一五九—一六〇頁)

(2) 舞出長五郎著「経済学史要」上巻一七三頁—一七五頁

(3) 裕正夫著「農業経済論」四九頁

(4) 舞出長五郎著前掲書 一七三頁

それではスミスの自然価格論をリカアドオはいかに処理したか。周知のようにリカアドオは、スミスの経済学に満足しないで、これを批判的に綜合した結果、経済学の研究を一つの全く新しい方向に導いた。けれどもそのさいかれは、なるほど多くの正しい側面でスミスの学説を継承し、これを發展させているが、他方またスミスを学ぶにあたつて大きな誤りを冒している。リカアドオがスミスから受け継いでいる正しい側面の基本的なものに、商品の価値の大きいさは、その商品の生産に必要とされる労働量によつて決定されるという、商品価値の一般的规定と、商品の生産価格は前払資本価値に平均利潤を加えた価格であるという、生産価格の規定との二つのものをあげることができらるであらう。前者については、ここで論ずる余裕をもたないのでこれを措き、後者について考えてみると、この場合、リカアドオはスミスの経済学のなから「十分な価格」をぬき出して、事実上の生産価格としてとり扱うとともに、スミスが自然価格と「十分な価格」との區別を立てたのをしりぞけ、いきなりこれを自然価格と名づけている。つまりここでは、自然価格と「十分な価格」との対置、區別は、かんたんに消えうせて、両者が容易に等置される結果、スミスがこうした表現によつてもち出した重大な暗示もまた、リカアドオにより回避されることになつたのである。しかし、地代論においては、リカアドオは、それゆゑに「十分な価格」すなわち生産価格を超える個別的価値の超過分を地代として規定し、これとともに生産価格のみを生ずる最劣等地による市場価格の決定、すなわち最劣等地における土地生産物の個別的生産価格が市場調整的価格となること、を明らかにして、差額地代の成立する諸条件を理論的に定式化した。このようにして、かれは、スミスの矛盾と不徹底のなから、一貫しうるものをひき出して、価値論と価格論とを首尾一貫したのであつて、これはたしかに、リカアドオの功績としなければならないものである。だがそれにして、マルクスが指摘しているよ

うに、スミスのこの不徹底は、またそれ自身正しい考察の結果でもあつたのであるから、これにたいするリカードの処理の仕方、一面的である憾みをまぬかれないのである。他方、リカードがスミスを批判するにあたつて誤つてゐる点は、これのみにとどまらず、当面の問題にかんするかぎりでは、価値と生産価格の同一視、差額地代における上昇的序列の無視の二つをあげることができる。

農業資本の構成が一般に相対的に低い場合、それは商品とその生産価格よりも高い価値をもつて販売し、それによつて剰余利潤を取得しうることになるが、この剰余利潤は、土地所有の作用により土地所有者に支払われ、いわゆる絶対地代になる。この場合に、リカードは、剰余価値と利潤、したがつてまた、商品の価値と生産価格とは同一物であるというスミスのドグマをそのまゝ前提していたため、差額地代だけを認めて、絶対地代を認めなかつた。そしてその結果、各種の耕作土地のうち、肥沃度の最も低いあるいは位置の最も不利な、いわゆる最劣等地に投ぜられた資本が、地代を支払うことを原則として否認し、資本制生産を成立せしめる前提となり、基礎となるところの土地所有を否定してしまつたのである。このことはまたリカードの差額地代の法則をも歪めてゐる。かれはつねに下向的序列の仮定から出発してゐる。そして最劣等な土地が最後に耕作され、増加した需要が、最劣等な最終耕作土地における生産物の個別的価値で販売される増加供給を必要ならしめると前提する。この場合には、最劣等な土地の生産物の価値が市場価値を規制するけれども、上昇的序列でも、優良地による増加供給が古き市場価値における増加需要に一致するときは、同じことであろう。リカードはこれを見落している。さらに、優良地の増加供給がより大きいならば、古き土地は耕作から投げ出されていなければならぬ、とかればつねに仮定してゐるが、しかし古き土地は、たゞ以前より少なく地代を払うか、又は全く地代を払わなくなるにすぎないのである。これも絶対地代を否定する誤りから由来していることは明らかである。そして、スミスが優良地の生産物の価値が市場価格を決定する特殊な事例をあげ、これによつて上昇的序列

を示していることにも、それゆえにリカアドオは気づかないでいる。このようにみてくると、結局、かれは、スミスの矛盾を正面から理論的に克服したことはない。つまり、スミスが自然価格についての敘述で与えた、絶対地代解決の鍵を無視することによつて、差額地代だけを解明するにとどまつたのである。

(1) Marx, "Theorien" Bd. II S. 138 (151頁)

(2) もつともリカアドオも、事実において最劣等地でも地代を生じうることを認めている。(Ricardo, *ibid.*, P. 314, 前掲訳書下巻 六四—六五頁)

五

最後に、スミスにおける地代および自然価格の諸規定が、その価値規定とどのような関連をもっているか、この点を考えてみよう。

さきに述べたとおり、自然価格が「十分な価格」の抽象的形態であるとする観点から、自然価格を構成する利潤と地代との合計は、産業一般の利潤すなわち総剰余価値を意味するものと解することもできるが、いまひるがへつて、スミスの価値論との関係においてこれを考える場合、その解釋は必ずしも正しいとはいえない。その理由はこうである。まづ第一にスミスにあつては、自然価格を構成する賃銀、利潤、地代は、価値とは無関係にそれぞれ決定された大いさであり、したがつて利潤と地代とは剰余価値を形成するものとなつていないからである。すなわち自然価格は、価値および剰余価値が商品の生産に投ぜられた労働量によつてつくり出されるものであることは無関係に、これとは独立に存在する賃銀、利潤、地代の価値によつて構成され、そして、賃銀、利潤、地代の価値が存在するのは、労働、資本、土

地などが存在するからであり、後者が前者の価値を生ぜしめる源泉であると、スミスは主張する。しかしこの主張は、スミスのいわゆる生産費説の基礎をなすものであり、資本制生産の外観すなわち競争の諸現象から抽出された俗流的觀念から生ずる、誤つた主張である。したがつて、これが、労働量による価値規定とは異つた、労働の価値による価値規定すなわち「第二の価値觀念」に基づくことは、いうまでもない。一般に、資本制生産の下における資本家と労働者とのあいだの、労働力の売買という交換は、少くとも結果からこれを見れば等価交換ではなく、そこではそれゆゑに価値にかんする一般的規定が破棄されている。すなわち、一定量の労働を含む、資本としての商品あるいは貨幣は、それ自身が含んでいる労働量よりも大なる分量の生きた労働を購買することができる。スミスは、この事実から労働量による価値規定が資本制生産の場合に妥当しないという結論をひき出したが、それはかれが、労働力がなしうる労働と、その労働力の維持および再生産に必要とされる労働とが、まつたく別個のものであることを知つていながら、労働力という範疇を理論的に確定しえず、貨幣の流通形態を明らかにしえなかつたからである。しかし、こうしたスミスの価値規定における混乱は、根本的には商品の生産過程の内面的關聯を輕視し、生産の結果すなわち流通過程の考察にのみとらわれたことに基つている。かくて、スミスの自然価格の説明は、その説明がいわゆる生産費説の立場からなされる限り、資本制生産の理論的分析を放棄するものであつて、剰余価値の源泉と發生との正しい説明に基くものではないのである。

スミスにおいては剰余価値は、むしろ労働価値説の本来の立場からくる価値分解論のなかに述べられている。たとえば「あらゆる社会においては、あらゆる物品の価格は、結局これら三部分のうちいづれか一つに、またはその全部に分解せられるものである。そして進歩せる社会においては、これらの三つが大部分の物品の価格の内に、その構成部分として、多かれ少かれ入り込んでいるのである。」と。スミスは、このように商品の価値を賃銀、利潤、地代に分解して

いるが、この場合、賃銀、利潤、地代はそれらの収入の取得者の手にはいる以前に、産業資本家の手中に存在しなければならぬ。すなわち三者は何人かの収入となる以前に、生産物価値の構成部分をなさねばならぬ。したがつて、スミスにあつては、利潤および地代は、生産的労働者が自分自身の賃銀すなわち可変資本価値と同時に、たえず再生産する剰余価値の構成部分をなすのである。もつともそのさいかれは、あらゆる商品の価値は投下可変資本価値プラス剰余価値に還元されるというドグマに陥つてゐるが、この点を措けば、利潤と地代とは正しく剰余価値に還元されているのである。⁽²⁾

ともあれ、スミスのいわゆる価値構成論と価値分解論とは、価値にかんする説明としては本質的に別々の事柄に属するものであり、したがつて、自然価格が前者の立場からの説明に基づくかぎり、自然価格を構成する利潤と地代とは剰余価値に由来するものではなく、それゆえにまたスミスの自然価格は労働量による価値規定から正しく展開されたものとはいえないのである。

(1) Marx, "Theorien", Bd. II S. 129 (邦訳改造社全集版第十卷一四一頁)

(2) Smith, *ibid.*, P. 50 (一〇五頁)

(3) Marx, "Kapital" Bd. II, S. 364 (前掲訳書第二卷第三分冊二三頁)

第二には、さきに述べた、生産価格を論ずる段階における平均利潤には未分化の地代部分が含まれてゐるとする解釋にしても、次のごとき疑問が生ずるからである。土地は資本制生産様式にとつては本来外部のものであり、それゆえに資本制生産の理論的分析を純粹に行うためには、それはひとまず捨象されなければならない。すなわち一般に超過利潤の発生機構が説明される段階では、土地所有ならびに独占された土地の経済的作用は捨象されている。各生産諸部門の

うちの特定の生産部門における資本が、平均的生産条件よりも優れた生産条件を有する場合、一定の市場価格または一定の市場価値の下においてこの資本は超過利潤を取得するが、この超過利潤が生ずるのは、けだし、特定の生産部門の商品価値は、その個々の生産に費された労働量によつては決定されず、その部門の平均的生産諸条件のもとで生産されている商品に費された労働量によつて決定されているからである。換言すれば、この場合個別的価値と社会的価値との差額は、優良な生産条件における商品はその個別的価値以上の社会的価値によりこの商品の含む剰余価値以上の特別剰余価値を実現するが、他方より劣等な生産条件の下で生産された商品はその個別的価値以下の社会的価値にそつてその剰余価値の全部を実現できないということから、一方におけるプラスと他方におけるマイナスとは相殺されて、平均的生産条件における市場価値に均等化されるものとみてよいであらう。したがつて、この超過利潤を生ずる資本の利潤は平均利潤の成立に参加し、それゆえにまた市場価値は優良な生産条件をもつ資本によつて生ぜしめられる超過利潤を含みつゝ形式されてゆくのである。かくて産業一般における超過利潤は、流動して恒常性を得ることなく、資本家により取得されては絶えず失われてゆくものとして、論じられている。これに反し土地生産が問題になると、それは地代化し、少くとも長期間継続するところの土地の自然的差異のゆゑに定着する。けだし、前者においては生産諸条件の優劣は資本の生産力の増進によつて解消され、平均化されうる傾向をもつているが、後者においては土地の生産力の差等は解消されないからである。農業においては、自己の商品価値の生産価格への転形、したがつて自己の利潤の平均利潤への還元からまぬがれる状態にある。それ故に、土地生産物を支配する市場価値の法則から発生する超過利潤は、平均利潤の均等化に直接に参加することなく、むしろ与えられた平均利潤を前提としてのみ説明されうるものである。このようにみてくると、農業生産において地代化する超過利潤は、産業一般において生ずる超過利潤とは質的に異なる規定を含んでおり、したがつていちがいに生産価格を構成する平均利潤が量的に分割されて、地代、利子に生成してゆくとみ

ることはできないのではなからうか。逆にまた地代論の段階における地代部分が、生産価格の諸規定を論ずるより抽象的な段階における平均利潤のうちに未分化の状態で含まれているとする見解も、無条件にこれを肯定しえないのではなからうか。

以上これを要するに、スミスは第五章における価値分解論と第十一章の地代規定とを結びつける努力をなすべきであつたし、またそれがためには両者の媒介をなす自然価格の諸規定を矛盾なく説明すべきであつた。すなわち労働量による商品価値の規定と価値の賃銀、利潤、地代への分解を正しく展開したスミスは、当然これにつづいて価値の生産価格への転化を問題とすべきであつたに拘らず、いきなり以上の展開とは無関係に「自然価格」を論じ、さらにまたこれとは無関係に地代規定に及んでいる。もとよりスミスの地代論をそれ自身としてみれば、基本的に正しい観点が含まれているが、しかし価値論と地代論とを媒介する生産価格の諸規定を論ずるにあたつてあまりに現象の敘述に流れたため、その地代規定にも多くの不備を逸れなかつたのである。

(1) 農業に投ぜられる資本といえども、全産業に投ぜられた資本の一部をなすがゆえに、これを除外して一般的利潤率が決定されるわけではなく、種々の面からこれに影響を与えるものと考えられる。